

W・サイモン、H・エルソン編

ロハシハ現存満洲本総合目録

神田信夫

今日、満洲本の多くは中国、日本をはじめヨンカル、ソ連、アメリカおよびヨーロッパ諸国に散在しているが、なかでもヨーロッパは最も大きだローランクションを有する土地の一つである。このたびローランクション大学名誉教授サイモン(W. Simon)氏と大英図書館(British Library)の東洋写本刊本部(Department of Oriental Manuscripts and Printed Books)の部長補佐のネルソン(H. G. H. Nelson)氏の共編によるローランクション現存の満洲本の総合目録が完成し、大英図書館の出版物として大英博物館出版部(British Museum Publication Limited)から刊行された。ナグリ一八二頁から成る大型の堂々たる豪華本である。

ローランクションにおける満洲本のヨンカルへの隨一だ、何よりも古の伝統を誇る大英博物館(British Museum)の図書を引き継いで一九七三年に創立された大英図書館である。

それは質量ともに世界でも有数のものと並んでゐる。私は一九六二年ローランクション在中、大英博物館の東洋刊本写本部(Department of Oriental Printed Books and Manu-

scripts)でその所蔵の満洲本を調査したが、その際閲覧室に置かれていたサイモン教授の作られた満洲本目録を利用させて頂いた。その目録には写本が一番から十九番まで、刊本が一番から百十六番まで列挙されていて、なかにはかなり詳しい解題のついたものもあつたように記憶している。今回刊行された『総合目録』の巻頭に掲載されている同教授の前言によれば、教授が初めて大英博物館所蔵の満洲本の目録を作成したのは一九四〇年とのことで、その後六〇年代になって、当時東洋刊本写本部に勤務していたグリンステッド(E. D. Grinstead)氏によって教授の手稿がタイプされて三十七頁から成る目録がなされたところ。私が見せて頂いたのはそれであたりと思ふ。ちなみに同氏はそのころおよびローランクション大学東洋アフリカ学院(School of Oriental and African Studies, University of London)チャーチル省(India Office)所蔵の満洲本の参照のために七頁を追加され、また一九六八年にはサイモン教授はロンドン大学の準教授であった故マックリーク(H. McAleavy)氏寄贈の満洲本の目録作成を始めた。

ヒューリエルソン氏はサイモン教授を助けて、これまでの目録を改訂再編して完全なものとすることになった。それには大英図書館の各部門にある満洲本の抄本を徹底的に探し出すと共に、ロンドン大学の東洋アフリカ学院、インド省図書館

文書館 (India Office Library and Records)、國立公文書館 (Public Record Office)、英國海外聖書協會 (British and Foreign Bible Society)、H社地理學會 (Royal Geographical Society)、H社亞洲學會 (Royal Asiatic Society) は、既に編纂を完了して程なく出版所蔵されている満洲本をもすべて網羅して、ロンドン現存の満洲本の総合目録の作成という大事業に発展したのである。東洋アフリカ學院所蔵の満洲本は、ロンドンでは大英図書館に次ぐ大きなコレクションである。その他の機関のものは、数量では必ずしも多くないが、かえって他に見られないものもあって重要である。ただ王立アジア学会所蔵の満洲本は、漢籍と共にリーズ大学 (University of Leeds) に永久貸出されてゐるので、同協会に残つてゐる写本一点が本目録に載せられてゐるに過ぎない。さらに編者はロンドンの王立学会 (Royal Society)、王立中央アジア学会 (Royal Central Asian Society) はじめ満洲本所蔵の可能性のありそうな伝道會 (Missionary Society) をも調査したが、残念ながら発見できなかつたのである。編者も断つていられるように、個人の藏書や思いがけない図書館におまかで保存されていないとは限らないとはいへ、よく多くの関係機関を克明に調査されたものと感心する。

本目録の編纂が進んでいたことは、偶々一九七五年の初夏にロンドンを訪ねたわが松村潤氏よりかねて聞いていたところである。いざれの部も言語、経学、哲学、宗教、歴

史、種々助言を与えたといふ。その翌年秋には東京に来られた大英図書館の東洋写本刊本部の部長代理ガードナー (K. B. Gardner) 出かぬ、既に編纂を完了して程なく出版されたとの情報を得ていたので、大いに期待していたのである。だが、いま实物を手にしてその見事さに感嘆せざるを得ない。一九四〇年以来、実に四十年に近い長年月を経て立派に完成したわけで、サイモン教授、ネルソン氏等の並々ならぬ苦心と労力とに対し心から敬意を表すると共に、世界の満洲学界のために慶賀に堪えない次第である。大英図書館であるこの『総合目録』の出版を高く評価しているのみで、出版を記念して本（一九七七）年三月一日から六月三十日まで四ヶ月にわたつて満洲本の特別展観が行われた。そしてその際、展観目録および満洲民族の歴史や文化、西洋における満洲学の状況などを簡単に記した四頁ばかりのパンフレットも作られた。大英図書館の非常な熱の入れようが窺われるが、尤もなことと言わねばなるまい。

さて本目録は、巻頭にまづ前記のように編纂の経過を記したサイモン教授の前言を掲げ、次に序論として目録の概要と凡例および謝辞を載せている。本文の目録は大きく三部に分かれ、第一部は写本、第二部は刊本、第三部は複製本とローマ字転写本である。いざれの部も言語、経学、哲学、宗教、歴

史、地理、政治、文学、医学の各類に分けられているが、第一部の写本には経学と医学のものはない。満洲本といつても、

満洲文の記されてゐるのはやべて含まれるのであつて、写本には満洲語とラテン語との辞典、満洲語とロシア語との辞典など西洋で作られたものも入つてゐる。といひて第一部には五十一種、第二部には百四十九種、第三部には七十九種の書物や文書が挙げられてゐるが、第二部の写本にはさむと同版や異版が存する場合、同一番号のあとに A.B.C.……と記号を付して一点々々リストしている。また第三部の複製本や転写本も別種のものがある場合は、同様に記号を付してゐる。

従つて載録書の総点数は、右の数よりかなり多い。

次に各事項の記述であるが、書名は満洲語はじめモンゴル語、チベット語、漢語をすべてローマ字に転写し、漢語には漢字を記してゐる。そして冊数、巻数、套数、框架の縦横の長さなど一々克明に記され、そのあと著者と書物の成立の年次、刊行者と刊行年などが述べられ、さらに内容についての簡単な説明を附したものもある。末尾にはその書物の所蔵機関名と、そこでの図書番号や函架番号が一々明記されているから頗る便利である。

わらに各事項において有益な参考となる場合には、参考文献との頁数が記入されてゐる。こうした文献としてはハクス (W. Fuchs) 教授の『満洲文書誌』(Beiträge zur ma-

ndjurischen Bibliographie und Literatur, Tokyo, 1936) はこのへんハシムト (P.G. von Möllendorff) やトウト (B. Laufer) 等の満洲語文献解題、渡辺薰太郎の『増訂満洲語図書目録』、李德啓の『満文書籍聯合目録』、ナムペ (N. Poppe) 教授等の『東洋文庫所蔵満蒙本目録』(Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, Tokyo and Seattle, 1964) などの代表的な満洲本目録、また戦後ロハシハド満洲本を調査した池上二良教授の「三一出版」にある満洲語文献について、「同上補遺」(『東洋学報』四五ノ三〔四七〕)や私の「現存の満洲語文献」(「Present State of Preservation of Manchu Literature」Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko XXV) などやべて二十種が挙げられてゐる。これらの必要な応じて注記がつけられていて、参考文献とは別個に参照すべき文献が列挙されている場合もある。このように懇切な参考記事や注記があるので、利用者にとっては甚だ有難いが、これを実際に作るのは容易な仕事ではない。編者の努力を多としたい。

なお第三部として載録されている複製本やローマ字転写本は、普通の満洲本とはやや趣きを異にするが、今までののような目録が殆どないのに、研究者にとってはたいへん有益である。台湾の故宮博物院から先年刊行された景印本の『田

満洲檣」や私共がローマ字に転写して記述をひけ東洋文庫か
ら刊行した『満文老檣』などの大冊はよい、例えばフッ
クス教授が曾つて“Monumenta Serica V”と發表された
論文中に転写翻訳のある崇禎四年の告白など、多くの雑誌論
文に掲載されている短いものまで一々丹念に擷し玉して列挙
せれてくる。

卷末には王立アジア学会所蔵のアミオ (J. Amyot) の『満
仏辞典』(Dictionnaire Tartare-Mantchou François, Paris,
1789-1790) のある写本や、私も前に紹介つたるのゆえ
東洋アフリカ学院所蔵の満文『元史』の稿本、或いは王立地
理学会所蔵の満文の説明のついた塞外地図など十一頁にわた
る十種の珍しい書物や文献の写真を図版として載せてい
る。図版のあとは索引で、まずローマ字によつて著者、編者、
翻訳者の名の索引と、書名や文献名の索引があり、次に漢字
の筆劃順によつて同じく人名索引と書名索引が作られて
いる。なかなかよく行届いた索引である。

以上本目録の概要を紹介し、その立派な出来栄えを述べた
が、書物の説明の記事について一一気付いたりを擧げる
と次の如くである。まず第一部の写本で、三五頁に I. 31 の
番号のついている『欽定大清会典事例』についてである。こ
れは東洋アフリカ学院の所蔵で、私も曾つて实物を見たこと
があり、拙稿「歐米現存の満洲語文献」(『東洋学報』四八)

11) も論記の「現存の満洲語文献」の文中でも簡単に触れて
おいた。科学院の藏本は卷11五五の一冊だけ、その内容は
boigon i jungan, fulun caliyan geren goloi coohai cali-
yan uju (即、俸餉、各省俸餉) である。『会典事例』
には嘉慶年間に編纂されたものと光緒年間に編纂されたもの
との二種があるが、いま漢文本と対照するも、内容上からみ
て後者であることは明るいである。本目録の説明では、嘉慶
1111年告成のものとしているけれども、この場合は卷11H
五は礼部の部であつて全く内容が違つ。なお光緒の『会典事
例』の満洲本は、私が直ちに实物を調査したことないが、こ
の他にハシムへの米国議会図書館 (Library of Congress)
に111册、東ベルリンのライプツィヒ國立図書館 (Deutsche
Staatsbibliothek) に不完全冊を含め50冊ある。わざ
と『ニャン現存東洋書本目録』(Verzeichniss der orienta-
lischen Handschriften in Deutschland) の一部として
行われたハック教授の手に成る『満文満文写本稀覯刊本』
(Chinesische und mandjurische Handschriften und
seltene Drucke, Wiesbaden, 1966) 110頁もねじ
“ハノイの民族学博物館 (Museum für Völkerkunde) へ
ハノイ大学東アジア文化創造学科 (Seminar f. ost-
asiat. Kultur- u. Sprachwissenschaft d. Universität Mün-
chen) による一冊存在するが、これは田嶋博士

東ベルリンの五十八冊は嘉慶二十三年告成のものとしているが、光緒のものであることは確かである。

次に第三部の覆製本で、一三六頁に「III.38」の番号がつけられており、「盛京内務府順治年間檔冊」についてである。これは一九四二年満洲帝国国立中央図書館籌備處から刊行されたものであるが、その翌年同處からローマ字に転写し日本文の逐語訳をつけた一冊が刊行されている。ロンドンには覆製本だけしかないようであるけれども、その説明中に他の一冊の存在を一言記しておいた方がよかつたかと思う。

ところでイギリスにはロンドンの他にも満洲本を所蔵している大学や図書館がある。オックスフォードやケンブリッジは言うまでもなく、私が実際に調査したマンチエスターのジョン・ライランズ図書館 (John Rylands Library) などもなかなか珍しい満洲本を所蔵している。本目録の編者が序論で述べているところによれば、イギリス全体の満洲本の総合目録をさらに作成する意図はないとのことである。というのには、ドイツのケルン大学 (Universität Köln) のギム (M. Grimm) 教授等による世界の満洲本の総合目録出版の計画があるからである。この遠大な計画は夙く一九三〇年代にサイモン教授が提唱されたもので、目下ギム教授が熱心に推進されているようである。ただその仕事は時間的にも労力的にみると容易なことではない。やはりその前提として、各国各図書館

の目録がまず作られるのが順序である。じつに二十年足らずの間に既に前記のようにドイツにおける満洲本の総合目録やわが東洋文庫の目録が刊行されている他、ウランバートルの国立図書館 (Ulaan Bayatur qota-daki ulus-un nom-un sang) の満洲本 (ヒンハルームのアジア諸民族研究所 (Institut narodov Azii AN SSSR) の満文写本の目録など) が出版され、台湾の故宮博物院の満蒙藏文図書目録もタイプ印刷された。近頃は松村潤氏の手に成るワシントンの議会図書館の満洲本目録が『東洋学報』(五七ノ一-1) 誌上に掲載された。ペリの国立図書館 (Bibliothèque Nationale) による下ビュイレンヤン (J. M. Puylaumont) 女史が日録を作成されたことから、近年台湾の故宮博物院や中央研究院から『印満洲體』や満文檔案など多量の満洲語文献が景印され出したこともあって、一時は沈滞していた満洲学がいまや世界的に再び活気を呈してゐている。極く最近アメリカのインディアナ大学のウラル・アルタイ学科 (Uralic & Altaic Department, Indiana University) かく “Manchu Studies Newsletter” (満洲文や Manju tacin i mejige) が、満洲学専門の学界で一歩を踏み出始めた。じつした時機に模範的な目録として『ロンドン現存満洲本総合目録』が刊行されたのは、眞に意義深いことと言わねばならない。今後いよいよ做って各地の目録が続々と作られ、ついに全世界の満洲

本の総和四巻が訳成するのを祈念してやめない次第である。

(W. Simon and H. G. H. Nelson: *Manchu Books in London, A Union Catalogue, London, 1977, 182 pages, 12 plates*)

アンストリー・ウェッセルス著

近代のアラビア語によるマホメット伝
——マハーメド・フサイン・ハイカル著
『マホメットの生涯』の批判的研究——

後藤 晃

イスラムの預言者マホメットの伝記に対する学問的興味は、彼の死後数十年に始まり今日に至っている。この千数百年間に書かれた「マホメット伝」は無数であり、イスラムとは縁遠い明治以後の日本ですら十点を超えている。ただ、当然のことながら、興味の内容は地域と時代により様々であり、イスラムが発展した中心舞台であるアラビア語世界では、イスラム法の法源研究のための古典的な「伝記研究」は次第にすたれ、十一世紀頃からは「聖者」としてのマホメットへの関心が高まっている。その関心のあとでは、古典的な伝記では

軽く触れられているにすぎないマホメットの為した奇跡が強調される。またマホメット個人への崇拜が盛んとなり、生年もかわからでないマホメットの「誕生日」もいつしか確定され、誕生祭が民衆のための一年を通しての最大の祭りの一つにまで発展した。古典的な伝記は法学者の間ですらかえりみられず、学者は物語り風の「聖者伝」を書き、人々はそれを読み、あるいは聞いて、マホメットを慕つた。

西欧からの知的刺激を受けたアラブ近代人にとって、自らの抛りだしであるイスラムを開いたマホメットへの関心は、おのずと、「聖者伝」とは別なるものになる。本書はそれを扱う。本書ではまず、一九二〇年代にエジプトにおこった文学者による「マホメット伝」執筆のブームの時代的背景が分析される。ついで、エジプトの代表的知識人タハ・フサインの『マホメット伝余話』、マホメットを漫画化して評判を得たウォルテールの戯曲に反撥してつくられたタウフィーク・ハーキムの対話劇、トマス・カーライルの小説に刺激されたアッカーデの『英雄マホメット』、戦後に出版されたシャルカーウィーの『自由の使者マホメット』とナギー・マフフーザーの『我が街角の人々』等が紹介される。そして本論は、副題にあるとおり、フサイン・ハイカルの『ベヤート・ムハンマド』の評論である。この『ベヤート・ムハンマド』は、そもそもは、西欧で評判を得、アラブ世界の知識人の間